埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

Research on the Self-Competence of Youth : The Relationship between Choosing Friends, University Life Satisfaction, and Occupational Anxiety

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 増南, 太志, 尾形, 和男 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1172

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

青年の抱く有能感に関する研究
― 友人選択、大学生活充実感、職業的不安との関連性 ―

Research on the Self-Competence of Youth
The Relationship between Choosing Friends, University Life Satisfaction, and Occupational Anxiety

増　南　太　志・尾　形　和　男
MASUNAMI, Taiji　OGATA, Kazuo

大学生活において、友人関係をどのように築くのかは、その後の大学生活や将来の職業への見方に影響すると考えられる。また、有能感の特徴がこれらの要因に関係する可能性がある。したがって、本研究では、学生を自尊感情と他者軽視の高低に基づき、全能型、自尊型、仮想型、萎縮型の４つの有能感の類型に分類し、友人選択の理由、大学生活充実感、職業的不安を比較検討した。その結果、自尊型（自尊感情が高く、他者軽視が低い）は仮想型（自尊感情が低く、他者軽視が高い）よりも、友人選択や大学生活充実感のポジティブな側面が高く、大学生活における不安や職業的不安などのネガティブな側面は低かった。また、自尊型は萎縮型（自尊感情と他者軽視が共に低い）よりも、相補性や類似性に基づいた友人選択を行っており、職業的不安が低かった。これらの結果から、有能感の特徴と友人選択、大学生活充実感、職業的不安の間に関連があることが示された。

はじめに

大学生の学生生活のあり方は、現在の大学生活そのものの満足感と同時に将来に向けた時間的展望のあり方にも何らかの影響をもたらすとも考えられる。

学生生活そのものの中でも特に友人関係が大学生活の満足感に影響しているとのことである（大対、2015）。同様に和田（1992）は友人による情緒的サポートが大学生の孤独感を和らげると同時に、友人や家族によるソーシャルサポートが得られている学生ほど、大学への満足感や幸福感が高いことを指摘している。しかし、その一方で最近の学生の特徴として深い関係を築くことを避けたり、友人への配慮の欠如や他人の目を気にしないことも特徴として指摘されている（橋本、2000；中園・野島、2003）。これは対人関係に何らかの問題を有していると考えられるのであり、その原因については種々のことが考えられる。

このことと関連して、学生の対人関係に関し良好な対人関係の取り方については、自尊感情の在り方が影響するとした指摘がある。自尊感情とは人が自分自身についてどのよう

キーワード：青年、有能感、友人選択、大学生活充実感、職業的不安
Key words　：youth, self-competence, choosing friends, university life satisfaction, occupational anxiety

に感じるのかという感じ方のことであり、自己の能力や価値についての評価的な感情や感覚のことを指す（山本、2001）。土井（2008）は現代青年の特徴として、自分は高い潜在能力を秘めており、高く評価されるべきであるという過剰な期待感を持っている。したがって周囲の期待とのギャップを感じた場合に自己肯定感が低下してしまう恐れがあり、それを防ぐために自己を肯定的に評価してくれる他者を求めその間に互いの対立の回避を最優先した対人関係を脅迫的に維持しているとしている。そのために自己を評価してくれる相手のみに対応し、そうでないと感じられる相手からは回避する傾向があると考えられる。これに関して、自尊感情は他者からのフィードバックに基づいて自分の振る舞いが集団から受容されるような適切で妥当なものであるかを感知するための指標（ソシオメータ）であるとされる（Leary、Tambor、Terdal、& Downs、1995）。本研究ではこの視点を基本的に用いて行くこととする。

また、岡田（2007）は現代青年に特徴的とされる友人関係のあり方と自己愛、自尊感情との関連性を明らかにするために大学生の調査を行った。その結果、自他を傷つけることを回避しながら対人関係を維持する場合、自己愛傾向の「注目・賞賛欲求」が高く自尊感情は中程度であったとしている。つまり、調査対象の学生は自他を傷つけないように警戒することで他者から肯定的評価を受けるような関係を維持し、それによって自尊感情の低下を抑制しようとしていると指摘している。またその一方で、自分の内面を開示し深い友人関係を持つ場合は自尊感情が高く、反対にそうした関係を避ける場合は自尊感情の水準が低いとしている。このように、対人関係のあり様は自尊感情を低くしないで相手と如何に関わるかということを媒介として変化することが指摘されている。

上記に示した自尊感情は如何に自己の自己肯定感を低下させないで相手と関わるかということを示した内容でもあり、若い世代が他者軽視や他者蔑視を通して根拠のない有能感を高める傾向が強いとする指摘（速水･木野･高木、2003）を反映したものでもあると考えられる。これは仮想的有能感といわれるものであるが、そのメカニズムには２つのことが考えられる（速水・小平、2006）。一つは、他者を軽視・蔑視することにより、自分を有意な立場に立たせようとする場合であり、二つ目は本人自身が今までの経験から自分の能力を高く評価し、他者の行動がぎごちなく未熟に感じられ、結果として他者を軽視する場合である。後者の視点を取り入れた考え方から、Hayamizu、Kino、Takagi、and Tan（2004）や速水・木野・高木（2005）は自尊感情と他者軽視との関連性を探ったが、両者はほぼ無相関であることを示した。同時に自尊感情は「自分に対する肯定的あるいは否定的態度」（遠藤・井上・冷川・藤原、1981）とする定義に基づくと、自己にとって納得のできない結果や内容はこれで良いということには至らないものであるが、これも自尊感情として扱う場合もあるということになる。したがって、仮想的自己有能感には自己への否定的な態度を持ちつつ他者軽視の行動をとる場合や、肯定的な態度を形成しているがゆえに他者軽視を行う場合など幅が広いものである。つまり、自尊感情と他者軽視の高低とその質的なあり方に基づく自己有能感はより現実的な観点に基づいて詳細に検討する必要があると考えられる。このような考え方から、本研究では大

学生の友人関係の在り方の基礎を検討するために、速水・木野・高木（2004）の提唱する他者軽視と自尊感情の高低に基づき有能感を４類型しより詳細で現実的な視点を取ることにする。

さらに、学生の職業選択に関して大学生活の充実度が高いほど職業的不安が低く、安定した学生生活の必要性が指摘されている（坂柳、1997）。しかも、安定した学生生活は人間関係の良好な状態と関連していることも示されており、学生生活においての友人関係の良好性の重要性が改めて指摘されている。

このように、大学生活充実度の根幹に関わるのは友人関係を中心とした対人関係であると考えられるものの、その友人関係のあり様は仮想的自己有能感により大きく左右される。したがって、このような視点から本研究では仮想的自己有能感のあり方が、自己の選択した友人関係のあり方にどのような影響をもたらし、また、学生生活にどのような影響があり、更には将来不安の１つと考えられる職業選択にどのように関わるのかということも明らかにし、学生生活に及ぼす影響を探ることを目的とする。

方法

１．被調査者

埼玉県内の保育・教育系４年生大学（Ａ大学）の学生131名（１～４年生）を対象とし、質問紙調査を実施した。女子学生が82名、男子学生が49名であった。平均年齢、女子19.62歳（$SD = .66$）、男子19.92歳（$SD = .89$）であった。

２．調査内容

調査に用いる質問紙は、自尊感情尺度、他者軽視尺度、友人選択の理由尺度、大学生活充実感尺度、職業的不安尺度であった。このうち、自尊感情尺度と他者軽視尺度は、有能感を類型化するために用いる尺度である。

①自尊感情尺度（10項目）

Rosenberg（1965）によって作成された自尊感情尺度の日本語版（山本・松井・山成、1982）を用いた。10項目で構成される質問紙である（**Table 1**）。

Table 1　自尊感情尺度と他者軽視尺度の質問項目

自尊感情	他者軽視
私は自分に対して肯定的である	自分の周りには気のきかない人が多いと思う
私は、人並みには価値のある人間である	自分の意見が聞き入れてもらえなかった時、相手の理解力が足りないと感じる
私はもっと自分自身を尊敬できるようになりたい	自分の代わりに大切な役目をまかせられるような有能な人は、私の周りには少ない
自分が全くダメな人間だと思うことがある	他の人の仕事を見ていると、手際が悪いと感じる
私はいろいろな良い素質を持っている	世の中には、常識のない人が多すぎる
私は何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う	話し合いの場で、無意味な発言をする人が多い
私は物事を人並みには、うまくやれる	知識や教養がないのに偉そうにしている人が多い
自分には、自慢できるところがあまりない	世の中には、努力しなくても偉くなる人が少なくない
私は自分のことを敗北者だと思うことがよくある	他の人に対して、なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる
私はだいたいにおいて、自分に満足している	今の日本を動かしている人の多くは、たいした人間ではない 他の人を見ていると「ダメな人だ」と思うことが多い

②他者軽視尺度（11項目）

速水・木野・高木（2004）が開発した仮想的有能感を測る尺度の改訂版（Hayamizu et al.、2004）を用いた。11項目で構成される質問紙である（**Table 1**）。

③友人選択の理由尺度（28項目）

勝家（2013）によって作成された「友人選択の理由」を測定する尺度を用いた。この尺度の下位尺度は「人間的魅力」「相補性」「類似性」「その他」であり、計28項目で構成される（**Table 2**）。このうち「人間的魅力」「相補性」「類似性」を分析対象とした。

Table 2　友人選択の理由尺度の質問項目

人間的魅力
学校が一緒（だった）だから
意見や考えが一致するから
ノリが良い（合う）から
一緒にいて楽しいから
自分の短所やミスを教えてくれるから
おもしろい人だから
尊敬できるから
一緒にいると刺激を受けることができるから
気が合うから
性格に好感がもてるから
信頼できるから
居心地がいいから
相補性
容姿や顔立ちが好みであるから
ファッションが好みであるから
自分の言うとおりにしてくれるから
一緒にいると目立つことができるから
学力や運動能力が優れているから
気前がいいから
色々なことをよく知っているから
物を貸してくれたり、車に乗せてくれたりするから
類似性
一緒に遊ぶことが多いから
行きたいところややりたいことが似ているから
趣味や関心が近いから
その他
性格が似ているから
家が近所だから
サークルやアルバイトなど同じ集団に所属している（いた）から
自分のすることを手伝ってくれるから
学生同士であるなど立場が近いから

④大学生活充実感尺度（23項目）

大対（2015）において使用された「大学生活充実感」を測定する尺度を用いた。「交友満足」「期待感」「学業満足」「不安」の４つの下位尺度それぞれに対し、大対（2015）において因子負荷量が高かった23項目を用いた。内訳は、「交友満足」10項目、「期待感」６項目、「学業満足」４項目、「不安」３項目であった（**Table 3**）。

⑤職業的不安尺度（15項目）

坂柳（1997）による職業的不安尺度を用いた。職業的不安とは「職業選択やその後の適応をめぐる職業キャリアの問題から生じる気がかり」（坂柳、1997）と定義する。この尺度は「自己理解に関する不安」「職業情報に関する不安」「経験欠如に関する不安」「相談

Table 3　大学生活充実感尺度の質問項目

交友満足
学内の友人関係に満足している
大学で寂しさを感じる
大学で本当に親しい友人はいない
大学では周りの人と楽しい時間を共有している
大学は居心地が良い
大学では周囲に溶け込めている
この大学は自分に合っていないような気がする
大学生活が楽しい
大学で孤立感をおぼえることがある
大学の友人の中では浮いていると感じる
期待感
大学ではいろいろな可能性が開けていると思う
大学で学ぶことで自分を深めることができそうだ
自分のやりたいことが大学で見つかりそうだ
大学で自分が成長できそうだ
大学で、今後の生き方について考えられそうだ
大学生活に意味を感じている
学業満足
興味のあることが大学で学べている
大学の授業が面白い
学びたいことが大学で学べている
自分の所属している専攻の授業内容に満足している
不安
将来の進路について不安である
４年間の大学生活で何をしたら良いのかわからない
これからの大学生活の先が見えず不安である

欠如に関する不安」「選択決定に関する不安」「職業適応に関する不安」の６つの下位尺度から構成されるが、Ａ大学では、職業情報や就職相談に対する専門的な体制が用意されているとともに、被調査者は保育・教育に関する実習を経験するため、労働経験をある程度獲得できる状態にある。したがって、「職業情報に関する不安」「経験欠如に関する不安」「相談欠如に関する不安」の領域を除き、「自己理解に関する不安」「選択決定に関する不安」「職業適応に関する不安」の３つの下位尺度各５項目を用いることとした（Table 4）。

上記①から⑤の各質問紙は全て、「かなりあてはまる」から「全くあてはまらない」までの４件法によって回答を求めた。

３．データ収集及び倫理的配慮

調査は平成30年４～５月に実施した。講義を通して学生に説明し、講義終了後了承してくれた学生に調査用紙を配布し、記入後、調査用紙を回収した。説明の際には、研究の目的、個人情報への配慮、データはシュッレッダーで処理するなど個人には迷惑がかからないことを説明した。

結果

１．各尺度の信頼性の確認

各尺度の信頼性を確認するため、クロンバックの α 係数を算出した。その結果、有能感を類型化するための「自尊感情」は $\alpha = .79$、「他者軽視」は $\alpha = .83$ であり、信頼性が確認された。「友人選択の理由」については構造化を図るために因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行い３因子（「人間的魅力」「相補性」「類似性」）が抽出された。それぞれの信頼性については、「人間的魅力」が $\alpha = .90$、「相補性」が $\alpha = .78$、「類似性」が $\alpha = .83$ であり、信頼性が確認された。また「大学生活充実感」についても構造化を図るために因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行い４因子（「交友満足」「期待感」「学業満足」「不安」）が抽出された。それぞれの信頼性については、「交友満足」が $\alpha = .86$、「期待感」が $\alpha = .90$、

Table 4　職業的不安尺度の質問項目

自己理解に関する不安
自分自身のことはよくわかっているので、それほど不安を感じていない
希望する職業に自分は向いているのかどうか、不安である
自分の能力がどのような職業に向いているのかわからないので、不安を感じる
自分はどの職業にも興味が持てないような気がして、心配である
自分の短所ばかりが気になるので、就職に不安を感じる
選択決定に関する不安
どのようにして職業を決めればよいのかかわからないので不安である
希望する職業はあるが、これが最良なのかどうか不安を感じる
社会変化や景気変動が希望職業に大きな影響を与えるのではないかと心配だ
自分は就職できないのではないかと心配になる
職業選択は十分考えたうえで行っており、あまり気にならない
職業適応に関する不安
就職後の生活には、あまり不安を感じていない
職業に就いた後、自分を十分に生かすことができるかどうか心配である
就職してもうまくいかないことがありそうで、それを考えると不安になる
職場の人間関係は気をつかうので、不安である
就職しても、長く雇ってもらえるかどうかわからないので、不安である

「学業満足」が α ＝.84、「不安」が α ＝.65であり、信頼性が確認された。さらに「職業的不安」では、「自己理解に関する不安」が α ＝.71、「選択決定に関する不安」が α ＝.65、「職業適応に関する不安」が α ＝.72であり、信頼性が確認された。

２．有能感の類型化

有能感の構成状況を明らかにするために、自尊感情尺度と他者軽視尺度に基づいて、被調査者を分類した。分類は、「自尊感情」の平均得点（2.49）と「他者軽視」の平均得点（2.22）を基準として、全能型（「自尊感情」、「他者軽視」ともに平均得点以上）、自尊型（「自尊感情」平均得点以上、「他者軽視」平均得点未満）、萎縮型（「自尊感情」、「他者軽視」ともに平均得点未満）、仮想型（「自尊感情」平均得点未満、「他者軽視」平均得点以上）の４つである。

３．有能感の類型による各尺度の違い

全能型、自尊型、萎縮型、仮想型の４類型の有能感とそれぞれの尺度がどのような関連性を有するのかを明らかにするために、４類型の有能感を独立変数、「友人選択の理由」、「大学生活充実感」、「職業的不安」を従属変数とする一元配置分散分析を行った。有意差が確認された場合には多重比較（Tukey法）を行った。その結果をTable 5に示した。

「友人選択の理由」に関して有能感類型別に比較すると、「人間的魅力」「相補性」「類似性」それぞれにおいて有意な効果が見られた（「人間的魅力」：F（３、127）＝4.64、p<.01、「相補性」：F（３、127）＝2.89、p<.05、「類似性」：F（３、127）＝7.45、p<.001）。Tukey法による多重比較の結果、「人間的魅力」では、「自尊型」が「仮想型」よりも有意に高く、「相補性」では「自尊型」が「萎縮型」よりも有意に高く、「類似性」においては「自尊型」が「全能型」「萎縮型」「仮想型」よりも有意に高いことが示された。

「大学生活充実感」に関して有能感類型別に比較すると、「交友満足」「期待感」「学業満足」「不安」それぞれにおいて有意な効果が確認された（「交友満足」：F（３、127）＝6.47、p<.001、「期待感」：F（３、127）＝3.15、p<.05、「学業満足」：F（３、127）＝3.23、p<.05、「不安」：F（３、127）＝3.47、p<.05）。Tukey法による多重比較の結果、「交友満足」では、自尊型が仮想型よりも有意に高く、萎縮型は仮想型よりも有意傾向で高いことが示された。「期待感」では、自尊型が仮想型よりも有意に高かった。「学業満足」では、萎縮型が仮想型よりも有意に高く、自尊型は仮想型よりも有意傾向で高いことが示された。一方で、「不安」では、仮想型が全能型と自尊型よりも有意に高かった。

「職業的不安」に関して有能感類型別に比較すると、「自己理解に関する不安」「選択決定に関する不安」「職業適応に関する不安」それぞれにおいて有意な効果が確認された（「自己理解に関する不安」：F（３、127）＝9.79、p<.001、「選択決定に関する不安」：F（３、127）＝6.59、p<.001、「職業適応に関する不安」：F（3,127）＝3.75、p<.05）。Tukey法による多重比較の結果、「自己理解に関する不安」及び「選択決定に関する不安」では、仮想型と萎縮型が全能型と自尊型よりも有意に不安が高かった。「職業適応に関する不安」では、仮想型と萎縮型が自尊型よりも有意に不安が高かった。

また、これらの結果を整理するため、自尊型と仮想型など特定の類型の組み合わせに

よって、どの尺度に違いがあったかをTable 6に示した。この表では、「類型」列に比較対象となっている類型が示されており、「差のあった尺度及び下位尺度」列にその内容が示されている。したがって、最初の行にある「自尊型＞仮想型」となっているところは、自尊型が仮想型よりも高かった下位尺度であり、「友人選択の理由」における「人間的魅力」及び「類似性」、「大学生活充実感」における「交友満足」「期待感」「学業満足」である。

3．各尺度の相関係数

「友人選択の理由」、「大学生活充実感」、「職業的不安」の各下位尺度の関係を検討するため、相関係数を算出した。Table 7にその結果を示した。「友人選択の理由」、「大学生活充実感」、「職業的不安」のいずれも尺度内では有意な相関が示された。

「友人選択の理由」と「大学生活充実感」の関係をみると、「人間的魅力」は「交友満足」「期待感」「学業満足」と有意な正の相関があった。また、「類似性」は「交友満足」と有意な

Table 5　有能感の類型による各尺度の違い

有能感の類型（N）	全能（29） 平均（*SD*）	自尊（42） 平均（*SD*）	仮想（36） 平均（*SD*）	萎縮（24） 平均（*SD*）	*F*	多重比較（Tukey 法）
友人選択						
人間的魅力	3.30（0.47）	3.59（0.31）	3.16（0.66）	3.29（0.65）	4.64**	自尊 **> 仮想
相補性	2.16（0.51）	2.35（0.60）	2.15（0.47）	1.95（0.54）	2.89*	自尊 *> 萎縮
類似性	2.94（0.62）	3.59（0.62）	2.96（0.79）	2.92（0.90）	7.45***	自尊 **> 全能、仮想、萎縮
大学生活充実感						
交友満足	2.86（0.49）	3.12（0.56）	2.58（0.61）	2.93（0.48）	6.47***	自尊 **、萎縮† > 仮想
期待感	2.95（0.61）	3.07（0.68）	2.63（0.73）	2.93（0.48）	3.15*	自尊 > 仮想 *
学業満足	2.92（0.62）	3.06（0.68）	2.70（0.62）	3.17（0.59）	3.23*	自尊†、萎縮 *> 仮想
不安	2.38（0.60）	2.40（0.62）	2.82（0.75）	2.64（0.73）	3.47*	仮想 > 全能 *、自尊 *
職業的不安						
自己理解に関する不安	2.55（0.57）	2.40（0.49）	2.93（0.57）	3.00（0.55）	9.79***	仮想、萎縮 > 全能 *、自尊 **
選択決定に関する不安	2.52（0.56）	2.50（0.50）	2.91（0.57）	2.94（0.48）	6.59***	仮想、萎縮 > 全能 *、自尊 **
職業適応に関する不安	2.79（0.56）	2.67（0.54）	3.04（0.65）	3.05（0.53）	3.75*	仮想、萎縮 > 自尊 *

（† p<.10、* p<.05、** p<.01、*** p<.001）

Table 6　有能感の類型の組み合わせによる各尺度の違い

類型	差のあった尺度及び下位尺度	
自尊型と仮想型（自尊感情・他者軽視ともに異なる）		
・自尊型＞仮想型	友人選択	人間的魅力、類似性
	大学生活充実感	交友満足、期待感、学業満足†
・仮想型＞自尊型	大学生活充実感	不安
	職業的不安	自己理解、選択決定、職業適応
自尊型と萎縮型（自尊感情が異なる）		
・自尊型＞萎縮型	友人選択	相補性、類似性
・萎縮型＞自尊型	職業的不安	自己理解、選択決定、職業適応
その他		
・自尊型＞全能型	友人選択	類似性
・萎縮型＞仮想型	大学生活充実感	交友満足†、学業満足
・萎縮型＞全能型	職業的不安	自己理解、選択決定
・仮想型＞全能型	大学生活充実感	不安
	職業的不安	自己理解、選択決定

（†は有意傾向を表す。他は有意差が認められた）

正の相関があり、「期待感」との間に有意傾向で正の相関が示された。「相補性」は「大学生活充実感」のいずれの下位尺度とも有意な相関が認められなかった。さらに、「人間的魅力」「相補性」「類似性」のいずれも、「不安」との間に有意な相関は認められなかった。

「友人選択の理由」と「職業的不安」の関係をみると、「相補性」は職業的不安の「自己理解に関する不安」「職業適応に関する不安」と有意な負の相関が認められたが、「人間的魅力」「類似性」は、「職業的不安」のいずれの下位尺度とも相関は認められなかった。

「大学生活充実感」と「職業的不安」の関係をみると、「交友満足」は、「職業的不安」の「自己理解に関する不安」と負の相関があり、「選択決定に関する不安」との間に有意傾向で負の相関が示された。「期待感」と「学業満足」は、「職業的不安」の「自己理解に関する不安」と有意な負の相関が示された。「不安」は「職業的不安」のいずれの下位尺度とも有意な正の相関が示された。

考察

本研究では、有能感のあり方が、自己の選択した友人関係のあり方にどのような影響をもたらし、大学生活や職業選択にどのように関わるのかを探ることを目的とした。有能感のあり方については、「他者軽視」と「自尊感情」の高低に基づき、全能型、自尊型、萎縮型、仮想型の４類型に分類した。以下では、これらの４類型のうち、「友人選択の理由」、「大学生活充実感」、「職業的不安」の違いが顕著であった自尊型と仮想型及び自尊型と萎縮型をそれぞれ比較して考察する。

１．自尊型と仮想型の比較

自尊型は仮想型に比べると、「人間的魅力」や「類似性」に基づいて友人選択を行っており、「大学生活充実感」については「交友満足」「期待感」「学業満足」などポジティブな側面が高かった。その一方で、仮想型は自尊型に比べると、「大学生活充実感」における「不安」や「職業的不安」のすべての項目などネガティブな側面に対して高かった。これらの結果から、仮想型は、友人選択において、他者のポジティブな側面をあまり見ておらず、そのことが「大学生活充実感」の低下や「職業的不安」の高まりと何らかの関係があると考えら

Table 7　各下位尺度の相関係数

	友人選択			大学生活充実感			職業的不安			
	人間的魅力	相補性	類似性	交友満足	期待感	学業満足	不安	自己理解に関する不安	選択決定に関する不安	職業適応に関する不安
友人選択										
人間的魅力	—	0.32**	0.65**	0.41**	0.24**	0.20*	-0.06	-0.02	0.07	0.01
相補性		—	0.31**	0.05	0.03	-0.08	0.05	-0.23**	-0.08	-0.20*
類似性			—	0.22*	0.16 †	0.13	-0.04	-0.07	-0.09	-0.06
大学生活充実感										
交友満足				—	0.53**	0.54**	-0.48**	-0.24**	-0.17 †	-0.14
期待感					—	0.79**	-0.36**	-0.24**	-0.13	-0.10
学業満足						—	-0.39**	-0.17*	-0.10	-0.09
不安							—	0.59***	0.61***	0.45***
職業的不安										
自己理解に関する不安								—	0.79***	0.72***
選択決定に関する不安									—	0.66***
職業適応に関する不安										—

（† p<.10、* p<.05、** p<.01、*** p<.001）

れる。

速水・木野・高木（2004）では､「仮想的有能感」と「生活満足度」における「学校生活満足感」及び「友人関係満足感」の間に負の相関が示されている。仮想型の対人関係について、仮想型は所属欲求が高いにもかかわらず、被受容感や被拒絶感が高いこと（箕浦・成田、2009)、友人へのポジティブな感情への共感が自尊型よりも低いこと（橋本・玉ノ里、2009)、仮想型は時間経過で人間関係が悪化する傾向があること（高木・丹羽・速水、2008）が示されている。したがって、仮想型では、他者に対する負の感情を持つことや、拒絶される可能性を持ってしまうことで、大学生活の充実感は得られず、不安が生じているのではないかと考えられる。また、そうした対人関係の問題は、時間の経過とともに悪化していくことが考えられる。

仮想型は自尊型に比べ、有意傾向ではあったものの「学業満足」が低いことが示された。学習に対する動機づけと関連づけて考えると、仮想型が「学業満足」に対して低くなる可能性を説明できる。速水・小平（2006）は、自己決定理論に基づく動機づけの観点から学習に対する動機づけを検討した結果、仮想型は自尊型に比べ、外的動機づけおよび取り入れ的動機づけが高く、同一化的動機づけと内発的動機づけが低い傾向にあった。さらに、尾形・増南（2017）は、学習動機づけのタイプで対象者を分類し、自尊感情、仮想的有能感、友人選択を調べており、自尊感情は友人選択動機づけと同様に学習動機づけに関連性があることを示している。その一方で、尾形・増南（2017）は、相関係数を用いた分析から、学習動機づけや友人選択動機づけが外発的動機づけ型であるほど、仮想的有能感が高いことを示している。このように、仮想型の学習動機づけは、外発的動機づけに基づくものであり、自ら学びたいという気持ちが高いわけではないと考えられる。

本研究では、仮想型は自尊型に比べると、「職業的不安」のいずれの項目も高いという結果であった。杉本・速水（2012）は、大学生における仮想的有能感と就職イメージや時間的展望の関係について検討しており、自尊型は、就職に対して希望をもてるものとイメージしているのに対し、仮想型は、就職に対して、拘束されるものであり、希望はそれほど持てるものではないとイメージしていることを明らかにしており、本研究の結果についても、仮想型が就職に対してネガティブなイメージを持つことから不安が生じていることが考えられる。なお､杉本･速水（2012）は､仮想型が就職に対してネガティブなイメージを持つ理由として、未来に起こりうる就職に対して、拘束的であるとネガティブに、または批判的にとらえることで、最低限の自己評価を保つための自己防衛的な役割を果たしていると解釈している。坂柳（1997）は、職業的不安の高い学生は、大学生活の充実度も低調であることをしており、大学生活の過ごし方について、自分なりの具体的な目標を設定し、それを達成していくための主体的な活動を展開していくことが重要と述べている。仮想型の場合、学業に関して主体的というよりは、外発的動機づけによるものであり、具体的な目標を設定しにくい状態にあると考えられる。このように、学業面を含めた大学生活の充実感の低さが、職業的不安につながっている可能性もある。

まとめると、自尊型に比べ仮想型では、他者に対してネガティブな感情を持つなど対人

関係の問題があるとともに、外発的動機づけに基づいて学業に取り組むといった特徴があるために、大学生活充実感の低さや職業的不安の高さにつながっているのではないかと考えられる。

本研究では、各下位尺度の相関係数の分析も行った。自尊型と仮想型で「友人選択の理由」に関して差があった「人間的魅力」と「類似性」についてみると、「人間的魅力」は、「大学生活充実感」の「交友満足」「期待感」「学業満足」と正の相関があり、これらの項目は「職業的不安」の「自己理解に関する不安」と負の相関がある。また、「友人選択の理由」の「類似性」は、「大学生活充実感」の「交友満足」と相関があった。したがって、「友人選択の理由」の「人間的魅力」や「類似性」は、「職業的不安」の「自己理解に関する不安」に対し、間接的に影響を与える可能性がある。しかしながら、あくまで相関係数による分析を行っただけであり、因果関係をとらえるような分析は行っていない。今後、下位尺度間の関係を明らかにするため、共分散構造分析などによる検討が必要である。

２．自尊型と萎縮型の比較

自尊型は萎縮型に比べると、「相補性」や「類似性」に基づいて友人選択を行っていたが、「大学生活充実感」に関しては違いがみられなかった。それに対し、萎縮型は自尊型に比べ、「職業的不安」のすべての下位尺度において高い値を示していた。

自尊型と萎縮型で「大学生活充実感」に差が見られなかったことに対して、萎縮型は仮想型よりも「大学生活充実感」について高い部分があったことから、本研究における萎縮型の学生は、他の研究の萎縮型の学生よりも、「大学生活充実感」が高かった可能性が考えられる。酒井・高田・五十嵐（2015）は、中学生を対象に、有能感の４類型と学校生活スキル等による「居心地の良さの感覚」の違いを検討しており、萎縮型は、集団活動スキルが高い場合に、「居心地の良さの感覚」が高く、集団活動スキルが低い場合は、「居心地の良さの感覚」が低かった。その一方で、仮想型は、集団活動スキルが高くても低くても「居心地の良さの感覚」が低いという結果であった。本研究の被調査者は大学生であるため、単純に酒井・高田・五十嵐（2015）の結果を当てはめられないかもしれないが、本研究における萎縮型の学生の多くは、集団活動スキルが高かったために、大学生活における充実感が高かった可能性が考えられる。実際、保育・教育系の学生は、もともと子どもと関わる仕事を志望していることが多く、子どもや人と関わることが好きである場合が多い。したがって、集団活動スキルをある程度備えた学生達であった可能性がある。

「職業的不安」に関しては、萎縮型は、自尊型や全能型よりも高いことが示された。萎縮型は、自分への自信の低さから劣等感が高く、無気力感を抱いている場合が多いとされており（速水、2006）、「職業的不安」に関しても、劣等感からくる不安などを抱えやすい可能性がある。杉本・速水（2012）は、有能感の４類型と時間的展望（目標志向性、希望、現在の充実感、過去受容の数値によって対象者を分類）の関連について検討するため、コレスポンデンス分析を行った結果、萎縮型は未来展望低群に位置付けられ、将来の目標志向や希望に関して低いという結果であった。また、中学生を対象とした研究であるが、酒井・高田・五十嵐（2015）は、萎縮型と仮想

型は、進路決定スキルについて自尊型や全能型よりも低いという結果であった。このように、萎縮型は、仮想型と同様、就職に対する不安を抱えやすいと考えられた。

各項目の相関係数の分析と関連づけると、自尊型と萎縮型で「友人選択の理由」に関して差があった「相補性」と「類似性」についてみると、「相補性」は、「大学生活充実感」とは相関が認められず、「職業的不安」の「自己理解に関する不安」と「職業適応に関する不安」に対して負の相関が認められた。したがって、「友人選択の理由」の「相補性」「職業的不安」の「自己理解に関する不安」「職業適応に関する不安」は何らかの結びつきがあるとともに、これらは自尊型と萎縮型を区別する要素となっている可能性がある。また、仮想型の場合と同様、「友人選択の理由」の「類似性」については、「大学生活充実感」の「交友満足」を通して、「職業的不安」の「自己理解に関する不安」と関連する可能性がある。

3．まとめと今後の課題

自尊型と仮想型、自尊型と萎縮型では、それぞれ「友人選択の理由」において重視している点が異なることがわかった。また、そのことが「大学生活充実感」や「職業的不安」に直接的あるいは間接的に影響している可能性も考えられた。

仮想型では、他者に対してネガティブな感情を持つなど対人関係の問題があるとともに、外発的動機づけに基づいて学業に取り組むといった特徴があるために、「大学生活充実感」の低さや「職業的不安」の高さにつながっているのではないかと考えられる。仮想型が、「友人選択の理由」において他者のポジティブな側面を重視しない傾向があることにより、「大学生活充実感」に直接的な影響を与え、それを介して「職業的不安」につながっている可能性がある。その一方で、仮想型は、そもそも就職に対してネガティブなイメージを持ちやすい傾向も考えられるため、これらの因果関係を明らかにすることが今後の課題となる。

自尊型と萎縮型では、「友人選択の理由」における違いや「職業的不安」における違いが認められたが、「大学生活充実感」については差が認められなかった。このことは、本研究の対象学生が保育・教育系の学生であったことが影響している可能性もある。したがって、萎縮型については、より一般的な学生を対象として検討することも必要である。

引用文献

土井隆義　2008　友達地獄－「空気を読む」世代のサバイバル－　筑摩書房.

遠藤辰雄・井上祥治・冷川昭子・藤原正博　1981　自尊感情の測定　遠藤辰雄(編)　アイデンティティの心理学　ナカニシヤ出版　Pp.64-84.

橋本　巌・玉ノ里美穂　2009　友人のポジティブ感情への共感及び非共有傾向と関連要因の検討　日本心理学会第73回大会発表論文集, 989.

橋本　剛　2000　大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連　教育心理学研究, 48, 94-102.

速水敏彦・木野和代・高木邦子　2003「仮想的有能感」を巡って　日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 46-47.

速水敏彦・木野和代・高木邦子　2004　仮想的有能感の構成概念妥当性の検討　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学, 51, 1-8.

速水敏彦・木野和代・高木邦子　2005　他者軽視に基づく仮想的有能感: 自尊感情との比較から

感情心理学研究, 12, 43-55.

Hayamizu, T., Kino, K., Takagi, K., & Tan, E. H. 2004 Assumed-competence based on undervaluing others as a determinant of emotions: Focusing on anger and sadness. Asia Pacific Education Review, 5(2), 127-135.

速水敏彦　2006　他者を見下す若者たち　講談社現代新書.

速水敏彦・小平英志　2006　仮想的有能感と学習観および動機づけとの関連　パーソナリティ研究, 14（２）, 171-180.

勝家さち　2013　現代大学生の自己意識と友人との関わりおよびアイデンティティ形成に関する研究　愛知教育大学修士論文.

Leary,M,R., Tambor,E., Terdal,S., & Downs, D. 1995 Self-esteem as an interpersonal monitor. The sociometer hypothesis. Journal of Personality and Social Psycholigy, 68, 518-530.

箕浦有希久・成田健一　2009　所属欲求は自尊心と他者軽視傾向の関係を媒介するか？　日本心理学会第73回大会発表論文集, 51.

中園尚武・野島一彦　2003　現代大学生における友人関係への態度に関する研究：友人関係に対する「無関心」に注目して　九州大学心理学研究, 4, 325-334.

尾形和男・増南太志　2017　青年の学習動機づけに関する基礎的研究: 大学生の友人選択動機づけ、自尊感情、仮想的自己有能感に基づく分析　埼玉学園大学紀要. 人間学部篇, 17, 127-136.

岡田　努　2007　大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連性について　パーソナリティ研究, 15, 135-148.

大対香奈子　2015　大学生活充実感を規定する要因の検討　近畿大学総合社会学部紀要、４（１）, 47-57.

Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image (Vol. 11, p. 326). Princeton, NJ: Princeton university press.

坂井李奈・髙田奈美・五十嵐哲也　2016　中学生の有能感タイプによる居心地の良さの感覚の違い：学校生活スキルとの関連から　愛知教育大学教育臨床総合センター紀要, 6, 37-45.

坂柳恒夫　1997　職業的不安と大学生活充実度との関係　愛知教育大学教科教育センター研究報告, 21, 79-85.

杉本英晴・速水敏彦　2012　大学生における仮想的有能感と就職イメージおよび時間的展望　発達心理学研究, 23（２）, 224-232.

高木邦子・丹羽智美・速水敏彦　2008　仮想的有能感と対人関係（１）：他者軽視傾向と対人感情の変容　日本心理学会第72回大会発表論文集, 36.

和田　実　1992　大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャルサポートの影響　教育心理学研究, 40, 386-393.

山本将士・速水敏彦・松本麻友子　2008　仮想的有能感と対人関係との関係（２）：仮想的有能感の低下と教師のかかわり方　日本教育心理学会第50回総会発表論文集, 247.

山本眞理子　2001　心理測定尺度集Ⅰ　－人間の内面を探る＜自己・個人内過程＞－　サイエンス社.

山本真理子・松井　豊・山成由紀子　1982　認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究, 30（１）, 64-68.